

至天
上真
太
靈
真
典



013716-000-8

特46-54

太靈真典(天真至上)

田中 守平/著

M44

ABA-0191



今や時代の思潮は混沌として人心動もすれば其歸趨を愆らんとし、時に或は極端なる危険の思想を懷抱するものあるに至る、洵に深慨の至りに堪えず、此時に當りて時代を救済し人心を啓導するに努むるは志あるもの、當さに念とするところ、予は現代に對する予自身の抱負を實行するの前提として、今茲にその思想の一端を陳べて以て大方の批判を仰がんと欲す、此書時代の謬想を矯正し人心を善化する上に於て、また必ずしも多少の裨補なしとせざるべきを信ず、若し之に對して忌憚なき批評を賜はるの榮を得ば幸甚之に過ぐる莫し、乃ち謹みて此小冊を尊臺の座右に呈す。



太
靈
主
尊

明治
44. 8. 20
丙寅

院示

我今示世衆
是天地大
道通達超極
涯光被一切
時至極大寶
也今人界暗
黑將難歸正
路不可得安
堵

靈光靈威道
包太衍宇宙
連亘絕邊際
遍滿一切處
世衆漂渦水
漂搖又漂搖
乃茲揭明燈

遣舟筏導之
是漂者舟筏
觀超量眞光
滅除三埃慾
正仰是道光
人界則得安
人至全矣

是暗夜明燈
觀絕邊大船
拂却七塵妄
正信是威船
世衆則得堵

大統院



教 宣

四

太靈を信じ靈勅を奉じ、皇上を尊み國家を重んじ、親祖を敬ひ一家を理し、衆を愛し分を明にし、生類を慈み萬物を育し、絶對に座して差別を照觀し、妄りに信せず濫りに疑はず、至公至正常に眞極を體得し、總てを超越して大度能く己れを持し、言説を慎しみ作法に倣ひ、禮を厚くし儀を整へ、溫情以て人に接し寛大以て他を遇し、節序を守り時間を貴み、儉に居り業を勵み、一事一物苟くもせず、克く致

へ克く斷じ、心を養ひ身を修め、精を蓄へ氣を磨き、靈性を顯輝し靈能を啓發し、不撓不屈、自疆自尊、七妄を去り三慾を滅し、全我に歸入して大器を成就し、機を察し變に處し進止法に適ひ行動則に違はず、一旦事に臨みては毀譽を顧みず、身命を惜まず、邁進以て至功を樹て至徳を成ずるを念とすべし。

大統院 田 中 守 平



教義

第一 太靈章

- 一、太靈を理信す、
- 二、太靈の超却超邊超在超非在を理信す、
- 三、太靈は主觀客觀の兩態全一超位(天真至上位)にして、零位數位の樞極位なることを理信す、
- 四、太靈の全性全能を理信す、
- 五、太靈は總元の大本主尊なることを理信す、

第二 宇宙章

- 一、宇宙は太靈性能の活現なることを理識す、
- 二、宇宙に在りて靈性靈能は經緯交乘錫交感全^{イシキヨウ}の形律に據りて發動するものなることを理識す、
- 三、宇宙凡總事物靈勅に出づるものなることを理識す、
- 四、宇宙凡總事物有眞義有靈意なることを理識す、
- 五、宇宙凡總事物超時際に遍亘轉旋して回歸復原すべきものなることを理識す、

第三 社會章

- 一、社會は宇宙凡總事物性能活現發動の絶對形式なることを理會す、
- 二、社會中人類社會は至上性能の發現なることを理會す
- 三、社會の根底に社會概性社會概能の存在するものなることを理會す、
- 四、社會は時間空間を通徹して至全性能を有するものなることを理會す、
- 五、社會の發動は總て有機的たることを理會す、

第四 國家章

- 一、國家は社會性能の完全なる發動形式たることを理得す
- 二、國家は人類社會序を確立保持すべき絶對機關なることを理得す、
- 三、國家の究竟目的は社會完序を確立するに在るものなることを理得す、
- 四、國家は至上權威を有するものなることを理得す、
- 五、國家は協合統一せらるべきものなることを理得す、

第五 個人章

- 一、個人は太靈に據りて生命を享得せるものなることを理體す、
- 二、個人は太靈性能感受の組織體なることを理體す、
- 三、個人と親祖と子孫と共に全一系體なることを理體す、
- 四、個人は家を以て生存の本據とし夫婦を以て性能發現の單位とするものなることを理體す、
- 五、個人は萬物の帥長たるものなることを理體す

教 領

第一

- 一、太靈を信奉すべし
- 二、總てを超越すべし
- 三、絶對位に座して差別位を照觀すべし
- 四、眞極を體得すべし
- 五、至功を樹て至徳を成すべし

第二

- 一、靈性を顯輝し靈能を啓發すべし
- 二、經緯交乘錫交感全^{イノチノ}の形律を體念すべし
- 三、靈勅を遵奉すべし
- 四、凡總事物の眞義と靈意とを徹觀すべし
- 五、一舉一動回歸復原の縁約に出づる旨を體し應果を求むべし

第三

- 一、社會的に活動すべし
- 二、社會的に性能を發現すべし
- 三、社會概性社會概能を徹見すべし
- 四、社會の至全性能に順應すべし
- 五、社會の有機的發動を體得すべし

第四

- 一、國家的に至上性能を發揮すべし
- 二、國家に效すは即ち社會全體に效す所以の道なる旨を解し國家に竭すべし
- 三、國家の究竟目的に隨順すべし
- 四、國家の至上權威に服隨すべし
- 五、國家の協合統一に努力すべし

第五

- 一、生命を保全すべし
- 二、全我に歸入し太靈と融會すべし
- 三、親祖を尊敬し子孫を撫育すべし
- 四、一家を經理し夫婦和合すべし
- 五、萬物を育成すべし

五性

靈性 心性 氣性 精性 體性

五能

靈能 心能 氣能 精能 體能

五意識

自然意識 經驗意識 感應意識 對抗意識 接觸意識

五觀

真觀 對觀 全觀 性觀 能觀

十正

正想 正智 正情 正意 正說 正為 正望 正業 正勤
正體

三慾

名慾 利慾 色慾

七妄

慢 怒 詐 謗 嫉 憎 怨

覺 譜

十四

大觀——仰て浩々たる宙空を眺む、星羅燦たり、俯して漠々たる大地を臨む萬物蠢たり、燦たる星羅、蠢たる萬物此間に塊然として生を享けて立てる人間は果して何の意義を有し何の價値を存して而して孰れに向つて適歸せんと欲するか古往今來茫々幾世載、天空幾轉回地界幾變遷、滔々として窮盡する所なく此天地の間に孳生せる人類、たとへその時に於て古今を別ち處に於て東西を異にすと雖みな此人生の意義と價値及其歸趨如何を解得せんが爲めに競進せるの狀は恰も夫れ一なり、而もその克く大自覺の境に入りて明確なる解案に接せるもの果して誰人かありとする、釋尊は天上天下唯我獨尊を叫び、孔子は天、徳を我に成せりと稱し、基督は自ら神の子たることを言へりしと雖、何れも未だ個性我を脱却して天眞の太靈と融會和合するに至らざりしやに見ゆるならずや、爾餘の聖者哲人亦た彼等の思想以上に超達したるものあるを見ず、嗚呼人生竟に解決し得べからざるか然り過去世代に在りては到底之が解決を見ざりしなり。

根本問題——然れ共今や時代の潮勢は日夜に東西の岸を濯ひて以て人生解決の急切を促進して止まざらんとす、勿論全世界人類の多數者は日常繁劇なる生存競争の渦中に奮闘しつゝ終に此大問題を思想上に意識し來らざるもの或は殆んど其全部なるやも計り知り難しと雖、而も若し夫れ半夜窃かに胸を懷て人生果して竟に如何なるべきかを思ふ時は誰かまた惆悵の念に堪へ得べき、人始め呱呱の聲を揚げしより終に冷かなる死の手の誘ふに至るまで、唯々衣食の爲めに働らき血情の爲めに動くこれ果して人生の眞相なるべきか、衣食固より無かるべからず而も衣食の爲めにのみ違々として生を終ふる吾人此間に在りて何等の眞意義をも發見し得ざるなり、血情素より動く、而も血情の爲めにのみ溺々として世を過ぐる吾人此間に於て何等の眞價値をも認識し得ざるなり、況んやその眞歸趨をや爰に曰ふ人生の解決とは衣食の問題に非ず、血情の問題に非ず、實に念々刻々呼吸の裏面を通じては個性の生命と宇宙の生命とに關聯し、呼吸の表面を通じては個性の生命と社會の生命とに連絡し、呼吸の表裏を全通しては宇宙社會の源髓と

關聯せる根本的大問題たるなり。

人生

嗚呼人生竟に如何、人生るゝやその生るゝ所以を知らず、死するやまたその死する所以を知らざるなり、輒ち之れを知らずと雖、生るゝは事實なり死するも亦た事實なり、生死の事實畢竟これ何に由來し何に原因するか、古人曰く生を知らず安くんぞまた死を知らんやと、然れ共今人はわか生を知り且つ死を知らんと欲するなり、翹に生死を知らんと欲するのみならず、生死を知りて更に生死を超脱せんことを希望するは實に現代人思想の潮勢なり、於是乎如何に生を知り死を知らんか、如何に生死を超脱せんか、而して更にまた生死超脱の究竟は如何、生死を知るもこれを超脱せずんば知らざるに等し、生死を超脱するも之か究竟を研竅せざれば以て人生の解決を遂げたりといふを得べからざるなり、嗚呼人生竟に如何

生死

抑々人の生死何によりて然る乎、百年以前何處にか我の形體あらんや、百年以後那邊にか我の形骸あらんや、人の齡長きも百歳を出づること極めて稀なり、嗚呼我は何時何處よりか此形體を得て而して何時那邊にか此形骸を横へ

んとはする、長きも百歳を出づること極めて稀なる此生命の根本は如何、而してその最終は如何なるべきか、人或は生命の根本は父母に在りと曰はん、而してその最終は墳墓に在りと曰はん、然れ共思へ其父母は果して何によりて生命を得たるかを、父母にはまたその父母あるにあらずや、即ち父母祖父父母曾祖父父母玄祖母と順次世代を溯り行くときは遂に人間最元始の時代に到達するを見ん、而して最元始時代の人間は果して何によりて生命を得たるかを思はざるべからず、之を極めずんば以て生命の根本は解せられざるなり、人の生命果して何に因れりや而して更に窃かに思へ、人は其生命を唯無意義に墳墓一介の土塊として了せしむべきものなるかを、たとへ其形骸は之れを一片の墳土として終らしむることあるも、生命の活能はむしろ曠久絶劫に不滅不盡にして有價值のものたらしむべきにはあらざるなきかを、若し之を研めずんば以て人生の歸趨は明瞭せりといふを得べからざるなり、人の生命果して何れに終るや

無常々觀

拱手して更に窃かに思へ、凡そ吾人日々の眺望底に於て萬有成壞の状態を見る、昨の今に等しきものあるか、今のまた明に同じきものある

か、洵に瞬間刹那の状態を捉へ來りて之れを説明するに其状態は既に流れ去りてまた同じからず、捉らへ來りし瞬間以前に在りても其状態また全くこれと相異なる畢竟捉らへ來りし瞬間の状態は其瞬間に於てその状態と變じ來れるものにして、過去の状態と同じからずまた未來の状態と等しからざるなり、實にや一念一刻變じてはまた變じ化してはまた化して殆んど底止する所なき此天地萬有の成壞状態に對して、『萬有無常』の感想は劈頭先づ吾人の念頭に浮み來るところ、無常はむしろ萬有の常態といふべきならずや、既に無常を以て常態とする萬有の現象中に在りて、獨り人間のみ豈夫れ能く此無常の圏域を逸脱し得べしとせん、人間是れ畢竟永劫に萬有の成壞と相伴ふて生死の經路を反覆し常に常なきを以て常とするものなることを觀するの外あらざるなきに似たり。

大實體

吁、人間竟に萬有と相伴ひて、億劫に亘り生死の間に轉々し以て無常の常態を反覆して底止する所を知らずとなす、而も吾人は翻て更らに考思せざるべからず、則ち此成壞生死の無常々態は抑も亦た何によりて起り來るべきかを、凡そ實體を離れて現象の存するなく現象を離れて實體を見ること難し、是

を以て吾人思念の及ぶ所は遂に新陳代謝變化に變化を重ねて須臾も靜止することなき萬有成壞人間生死の所謂無常々の現象中に在りて此現象の由來する根本の原因となるべき大實體の如何なるものなるべきかを認識せざらんと欲するも得べからざるに至る、蓋し自然世界の凡總現象は現象自身が自立せるにはあらずして其根本に大實體あり、即ち此大實體に原因附着せる所の相狀たるに過ぎざるものと理解するの外あらざるなり、而して此相狀は成壞生死を反覆して一瞬一刻も常態を保つことなしと雖、其根本の大實體に至りては超等至上にして空間上絶限ならざるべからず、時間上超劫ならざるべからず、既に定限あり始終あるものは萬有轉々變化の大原因となること能はざればなり、然り眞に此根本の大實體に至りては超等至上絶限超劫にして、相狀たる現象の成壞生死によりて増損する所なく、曠久常住依然として生滅變化の外に超絶して曾て卒に盈虚消長あることなき也。

太靈

人一度び思念を凝らして萬有の成壞人間生死の根本を思量考案し、而して此大實體に想到せば、則ちまた不生不死遂に自己が絶限力と超窮命との發現なることを自覺し得て、生死の本源由來を解得し所謂生死を超脱して以て究竟

の大悟徹に達するに至らん、今ま此大實體之を稱して茲に『太靈』といふ、洵に太靈は純眞至全妙融自在、其全性全能の發現するところ即ち宇宙を形織し社會を組成して超時際に遍亘し、回歸復原流轉變遷して竟に窮極すること莫し、即ち凡總の事物現象は咸な悉く太靈の性能を感受して其根源を同ふし其宗祖を共にし以て全系の聯關相續を作り、未だ曾て相離るゝことあらざるなり、洵に宇宙社會は太靈性能の活現にして吾人々間また等しく靈性靈能を享受して周圍の凡總事物と互に相依り相關はり茲に必然の結果として現世に生れ出で、此天地の間に立つ、根本實に太靈に胞胎し宇宙に聯關し社會と相連絡す、實にや我の生命は念々刹那に於ける呼吸の裏面を通じては宇宙に關はり同體たり、呼吸の表面を通じては社會に連り一體たり、而して呼吸の表裏を全通しては太靈と融會して天真の至上體たるなり。

全我格

嗟、宇宙社會と同一體にして太靈と融會して亦た至上體たる我！我は是れ個性の我にあらずして宇宙と冥合して一面『宇宙我』を形成し、社會と契合して一面『社會我』を形成し、兩面の我を全合しては則ち太靈と融會して茲

に『全我格』を大成せる我たるなり、一念發起して此全我格の大悟徹に及ぶや、輒ち天上天下何ぞ敢て我を妨ぐるの一物あることあらんや、十表五界何ぞまた敢て我を遮るの一象あることあらんや、太靈の力は我に於て始めて見ることを得、太靈は我なり、我は太靈なり、太靈の性能は我の性能なり、我の言行は太靈の言行なり、宇宙は我なり、我は宇宙なり、社會は我なり、我は社會なり、宇宙の轉回、は是れ我の轉回、社會の變遷は是れ我の變遷、我の一舉手は是れ宇宙の一舉手、我の一投足は是れ社會の一投足たるなり、太靈の主張は即ち我の主張にして我の主張は即ちまた太靈の主張、宇宙の目的は即ち我の目的にして我の目的は即ちまた宇宙の目的、社會の理想は即ち我の理想にして我の理想は即ちまた社會の理想たるなり、於是乎人は輒ち須らく宇宙の目的に協合して行爲するに於て始めて其意義を有し、社會の理想に適合して活動するに於て始めて其價値を存し、而して太靈の主張と抱合一致するに於て始めて其歸趨は斷定し得らるべきなり。

曠劫永久の活生命

何をか宇宙の目的とし何をか社會の理想とし而してまた何をか太靈の主張とはする、曰く向上進展是れ宇宙の目的とするところ

ろ、曰く全等和合是れ社會の理想とするところ、曰く至切至徳是れ太靈の主張とする所たるなり、洵に一垂の水、一輪の花も猶ほ且つ向上進展を念となす、況んや人に於てをや、飛禽走獸も猶ほ且つ全等和合を旨となす、況んや人に於てをや、一木一石も猶ほ且つ以て高大の功徳を惠慈す、況んや人に於てをや、人は須らく向上進展せざるべからず、向上進展全等和合以て能く至功至徳を成就せざるべからざるなり、竟に知んぬ人生の眞意義は宇宙と冥合して生命の向上進展を圖るに在ることを、人生の眞價値は社會と契合して全等和合を期するにあることを、而して人生の眞歸趨は太靈と融合して靈性を顯輝し靈能を啓發し以て絶比の至切至徳を成就するに在ることを、人々宜しく速に『個性我』を脱却せよ、『個性我』を脱却して天真の至上體に歸入し『全我格』を大成せよ『全我格』成る即ち太靈の玄々に參し宇宙の眞々に達し社會の機々に通じて全性全能自由自在、一言能く超邊の光輝を放ち一舉能く超量の光明を發し、一動能く超盡の光華を啓らきて以ちて向上進展全等和合を遂げ至功至徳超限絶大なるに至るべし、果して然る則ち又、たとへ肉我百歳にして滅ぶるも靈我は曠劫に其光を放ち、體我たとへ百年にして亡ぶるも心我は永久に其能を現はし超時際に遍亘して生命能く活如たらん。

天聖法門 田中守平



自識

明治四十四年八月十七日印刷
明治四十四年八月二十日發行

發著
行作
人兼
田 中 守 平

東京市牛込區西五軒町三十四番地

印 刷 人 武 井 万 二

東京市神田區三崎町三丁目一番地

印 刷 所 日 本 印 刷 株 式 會 社

東京市神田區三崎町三丁目一番地

東京市牛込區西五軒町三十四番地

發 行 所

太 靈 府 修 道 館